

	京都大学 農学分野
学部等の教育研究 組織の名称	農学部（第1年次:300） 大学院農学研究科（M:263 D:120） 大学院生命科学研究科（M:75 D:33） 化学研究所 生存圏研究所
沿 革	大正12（1923）年 京都帝国大学農学部設置 大正15（1926）年 化学研究所設置 昭和24（1949）年 新制京都大学農学部設置 昭和28（1953）年 大学院農学研究科設置 平成11（1999）年 大学院生命科学研究科設置 平成16（2004）年 生存圏研究所設置 平成22（2010）年 化学研究所、生存圏研究所が共同利用・共同研究拠点に認定
設置目的等	大正12年、京都帝国大学農学部は、第一次世界大戦後の都市人口の増大及び農産物需要の高まりを背景に設置された。化学研究所はその3年後、化学に関する特殊事項の学理及び応用の研究を掌るために設置された。その後農学部は、時宜を得た改組を経て現在の農学部・農学研究科になるとともに、新しい生命科学の推進と地球環境保全を目的とした研究を進めるために生命科学研究科が、人類の生存を支える場である「生存圏」の正確な理解と問題解決により、人類の持続的発展と福祉に貢献することを目的とする生存圏研究所が設置された。
強みや特色、 社会的な役割	<p>京都大学の農学分野は、その原点であるフィールドに根ざした世界トップレベルの研究により、生命・食料・環境に関わる各領域で学問の源流を形成するとともに、常に我が国の農学分野の発展に主導的な役割を果たしてきた。現在は、人類の生存環境の諸課題解決と持続的発展に寄与するとともに、豊かな教養と高度な専門性、国際性を兼ね備えた人材の育成を目指し教育、研究、社会貢献に取り組んでおり、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <p>○ 京都大学の理念に基づき、自由の学風のもと、従来の農学分野の枠組みを超えた専門知識と研究態勢の統合により、高度な専門人材育成の役割を充実するとともに、より深い専門性と幅広い視野及び</p>

高い倫理性をもつ高度な研究能力を有する先導的な人材を育成する役割を果たす。

- フィールド実習や研究指導を重視したカリキュラムにより、自然や社会現象に対する深い洞察力や実践的な思考を養う。一方、外国人留学生を対象に英語だけで修了できる課程や、最先端の農学・生命科学の研究を担う人材育成を目指すプログラム、資源の枯渇や温暖化等、地球規模の課題解決に貢献する実行型国際人の育成を目指すプログラムなど分野横断的な特色ある教育実績を踏まえ、全地球規模で活躍できる農学系人材を育成する学部・大学院教育を目指して不断の改善・充実を図る。
- 農学分野の多種多様な領域における地球規模、かつ独創的な最先端研究の実績を生かし、人類の生存環境の向上と発展を目指し、世界トップレベルの研究を一層強力に推進する。
具体的には、世界の食料生産技術の向上と生産環境保全の推進、人類の持続的発展を支える循環型資源・材料としてのバイオマスの利活用、卓越した機能を示す物質創製など化学に根ざした生命現象の解明と制御、また、複数部局に分散していた生命科学の領域を横断的に統合したことにより創出された生物機能解析などの世界最高水準の研究実績を生かし、生命・食料・環境に関する分野横断的な研究の一層の深化と展開を図り、関連分野の拠点としての役割を果たす。
- ナショナルバイオリソースプロジェクトへの参画、バイオナノマテリアル研究成果の事業化に向けたプラントの建設、微生物を利用した有用物質生産の工業化、医農薬機能化合物の実用化・製品化などの実績を生かし、産官学の各フィールドで中核となる人材を継続的に供給しながら、グローバル視点に立った生命・食料・環境に関する諸課題の解決に貢献する。
- 社会人を修士課程、博士後期課程学生として受入れているほか、研修員としての受入や、木質材料や森林バイオマス関連の民間研究者を共同利用・共同研究者として受入れるなどの実績を生かし、社会人学び直しを推進し、我が国の農学分野の発展に資する。
- 農学分野全体として継続的に、次世代を担う高度な技術者・研究者の養成や新しい研究分野の創出を行う。これを支える全学的な取組として、外国人教員の学部・研究科への配置等を通じ学部教育全

	<p>体のグローバル化を行うことにより、英語力や教養力を強化し、それらを生かして国際的に活躍できるグローバル人材を育成する体制を整備する。また、本学の理念に基づき一層充実した教育研究が可能となるよう、教育研究組織の再編を通じて全学的な連携・協力体制を構築し、本学の機能強化へとつなげる。</p>
--	---